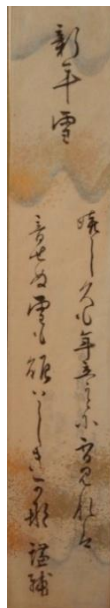


明治天皇に供された説明書

明治 11 年(1878 年)8 月～11 月に行われた明治天皇の「北陸・東海御巡行」の際、長野滞在(同年 9 月 8 日～10 日)において、学校での天覧授業や各地の産業・名産品の天覧が行われた。

『明治十一年八月明治天皇長野駐輩の砌天覧に供した高坂謙輔の説明書に高坂昌信の三男右近介宗澄の孫五郎右衛門宗久居を大草に占め農となりしより子孫継続今に至る。家に鎧冑及此指物を伝う、とある。』 『『大草城』下平加賀雄著』
右近介宗澄は、高坂弾正三男の昌定とみられ、文禄 3 年(1594 年)頃、確認されている。その孫の五郎右衛門宗久は、高坂道白と改名したものと思われる。妻は飯島家より嫁いでいる。この頃、農長となり帰農した。
高坂謙輔は、国学や歴史に深く通じた人物であったため、単に地元の産業製品を並べるだけでなく、信濃国の歴史的由緒、古社寺の宝物、あるいは伊那地方を中心とする伝統的な産物や旧蹟の伝承について、天皇の天覧を仰ぐための詳細な書面(御説明書)を作成し、提出する大役を担った。当時、天皇が地方を回る際、その土地の有識者が歴史や地勢を解説する「説明書」を提出することは、巡幸における重要な儀礼・手続きの一つであった。高坂家の由来については、高坂家文書の「高坂家由緒書」を参考にして作成したと考えられる。
宮内庁に説明書の原文の照会をしたところ、『「幸啓録」等に記録は見当たらなかったが、当時の残存史料は必ずしも十分ではなく、関連する記録が現存していない可能性もある。』とのことであった。



(新年雪)「嬉しくも年立かどに雪見れば音せぬ雪も
願いしきかな 謙輔」(川端紅葉保有)

明治 34 年 6 月 宮中月次歌会に宗良親王を題に詠進した
宮中奉仕者 47 人の和歌の短冊^{たんざく}を大河原釜沢の宗良親王
の祠に奉献した。48 葉を帙^{ちつ}に収め至誠帖^{しせいじょう}と称して同家に
残っている。謙輔は宮中とのつながりが深かった。
(川端紅葉著 2026・10・3)